

---

# この傷が無くなるまで

螺子（ねじ）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この傷が無くなるまで

### 【Nコード】

N7245V

### 【作者名】

螺子<sup>ねじ</sup>

### 【あらすじ】

小笠原怜次は日本で最も恐れられているヤクザ集団『小笠原組』の組長だ。彼にはもはや怖いものなど何もなかった。なぜなら彼は苦しみも、痛みも、悲しみもすべて完全に征してしまっているのだから。

そんな彼に隠された驚きの事実とは一体……？  
これは連載小説『Kのブルー』に登場する狂人、小笠原怜次が主人公となったバトルストーリーである。

## プロローグ

残暑が厳しいある日のこと。たくさんの田畑が並び、草木がところどころに生い茂っている、車一つ通らない静かな村の一角で、2人の女子中学生が誘拐されるという恐ろしい事件が起こった。

2001年9月20日午前10時。

事件から一週間がたった現在でも警察による搜索活動は続いているが、事件の目撃者が出てくることも、有力な情報が入ってくることも全くなく、事件解決の見込みはゼロという最悪の状況下にあるのだった。

ちようどその頃、事件現場のすぐ近くにある大きな和風の家に住む1人の男、古谷次郎ふるやじろう55歳は警察の捜査の甘さに疑問を持っていた。「なんでだ？なんで俺はこうしてここにいられているんだ？まったく、田舎の警察は捜査が甘いなあ。こんなに近くに犯人がいるつてのによお。なあ！」

古谷の家には口にガムテープを貼られて、全身を縄で縛られ、首には犬用の首輪が付いている2人の女子中学生が下着一枚で涙を流しながら床に倒れ込んでいるのだった。紛れもなくこの女子中学生こそが今回の事件の被害者であり、この古谷次郎という男こそが今回の事件の犯人なのである。

「まったく、さすがに一週間もこいつらで遊びまくったら、飽きてきちまったよ。またアイツらに頼んで新しい中学生連れて来てもらおうかな。」

2人の女子中学生の体はすでにこの悪魔のような男の餌食となってしまうていた。

ブサイク面でメタボ、おまけにハゲていて性格も悪い最低男古谷。

55年の人生の中で恋人が出来たことなど一度も無く、ただ中学生ぐらいの女の子をイジメたり犯したりするのが趣味の変態ジジイ。強力な犯罪グループの人間を金で雇い、近くにある中学校の女子生徒を誘拐してもらっているのだった。

「あーもしもし、またもう一人頼みますわ。そうだね……。三年生の森さんって人がいいかな……。あー2年生の井上さんもいいなあ……。」

中学生の写真が載っているアルバムをペラペラとめくりながら、ルックスの良い人を指名していく。まるでレストランでメニューを注文しているかのような口ぶりで。

注文品となった森さんと井上さんは、すぐに古谷の家に届くこととなった。

そして背の高い不気味な男がその二人の女子中学生を連れて古谷の家を訪ねる。

「はい、こちらが井上さんで、こっちの髪の長いほうが森さんね。じゃあ1人10万ずつで合計20万円になります。」

井上さんも森さんも首輪をかけられ、口をテープでふさがれてしまっていた。

「ほれ。ご苦労。」

古谷は金持ちだ。20万ぐらいの金が普通にポケットに入っていたりもする。そしてその金を使って様々な犯罪行為を繰り返してきたのだ。すると20万を受け取った不気味な男は突然古谷に一つ質問をした。

「そういえば古谷さん、先日ここに下平しもだいらという男が現れませんでしたか？」

「……。あ、今ウチにいる2人の女の子を連れてきたのは確かそいつだったな。だけどそれがどうしたんだ？」

「我々の組織は今その人を探しておりまして、いろいろな情報を集

めているんですよ。」

「・・・・・・・・・・知らん。俺は何も知らん。じゃあな。」

古谷はその玄関の戸を少し乱暴に閉め、二人の女子中学生を居間に連れていった。

これで古谷の家に監禁されている女子中学生は4人になった。古谷はその4人を居間で並べて、いやらしい目つきで眺めて、ニヤニヤと笑っている。

「フヒヒヒヒ。さあ、今日からみんなで仲良く暮らすんだよお！」

「んー！んー！！」

口をふさがれた女の子たちはまともにしゃべることが出来ない。

「さあまず今日は新入りの井上さんにいろいろとご挨拶してもらっちゃおうかなあ！」

と古谷が言ったときだった・・・・・・・・・・。

古谷の背後に30代半ばぐらいの180センチほどの怪しい男が立つ。

「そんなに女の子集めて何するの？」

「はあ！？」

突然現れたその男に驚く古谷は、素早く後ろを振り返る。するとその怪しい男のストレートパンチが古谷の丸い顔にヒットし、古谷は後ろに大きく吹っ飛んで、壁にたたきつけられた。

「ぐはあ・・・・・・・・・・な、何すんじゃゴルアアー！！」

キレる変態ジジイ。それに対して、その男は自分の金髪の髪型を7対3にきつちりと分けながらヘラヘラとしていた。

「いやいやゴメンゴメン。俺、口より先に手が出ちゃう癖があるからつい・・・・・・・・。」

「ふざけんな！て、テメエ！いったい何の用なん」

怪しい男はキレて怒鳴り始める古谷のわき腹に強烈なボディブロ

ーを入れる。そしてよろめいた古谷の胸ぐらをつかんだ。

「誰に向かつて口きいてやがる。敬語使え、敬語。」

「はあ！？だ、誰って…………お前何者だよ…………うぐ…………」

ボディーブローの痛みが響いて、しゃべるのも困難になってくる古谷。そんな古谷にまたパンチを入れる怪しい男。今度は少しフェイントを入れてから一発。

「俺は下平って奴を探している人間だ。お前知ってんだろ？早く教えろよ。」

「……………ああ？なんでお前なんかに教えなきゃいけないん強がろうとする古谷を力ずくで弱らせようと、またボディーブローを食らわせる怪しい男。

容赦のないパンチを何発も食らった古谷の顔はこの時すでにかなり変形していた。

「おいデブ、能書きはいいからさっさと行方を吐けえ！！」

その男の目は怒りで血走っていた。

「ハア…………ハア…………ハア…………ハア…………神奈川県のハングリーブルー隊とかいうのに会いに行くとか言ってたぜ？」

と古谷は正直に言った。しかしなぜかまた一発顔面にストレートパンチが直撃する。

「け！い！ご！…………言葉の使い方に気をつけやがれ！」

その怪しい男は、ため口で話されること自体を拒んだ。

「な！何で敬語使わなきゃいけないだ！…………あんたいたい誰なんだよ！」

「しょうがねえなあ。本当はお前なんかに組の名前出すのは嫌だったんだがな…………俺はな…………小笠原組の組長小笠原怜次っつーモンよ。」

『小笠原組』という単語を聞いたとたんに古谷は全身から大量の冷や汗が吹き出し、震え上がり、怯えた。そしてすぐさま怜次に向か

つて土下座をする。

「も……申し訳ございません！！た……只今のご無礼をお許しください！！！！」

「フツ……」

先ほどのヘラヘラとした表情から一転、古谷は絶望したような表情に変わるのだった。

小笠原組は東京新宿を拠点に活動する、超攻撃的なヤクザ集団なのだ。

> i 3 0 2 4 3 — 2 4 7 9 <

小笠原組の白と黒で描かれた不気味な家紋を見れば、誰もが震え上がる。

凶悪人間が集うこの集団に齒向かうことは世間では自殺行為とされているほどであり、今までたくさんの方が彼らの餌食となってきた。そしてそんな極悪集団の組長ともなろうお方に対する無礼極まる言動を行ってしまった古谷はもう死ぬ以外に道は残されていない。

「なんでもします！で、ですから、命だけは御助けを！情けをください！情けをください！！」

大声で謝り続けている古谷の目は大粒の涙であふれかえっていた。そんな古谷に、容赦なく蹴りを入れる怜次。

「るっせえなあああ！！！豚みてえな顔して、こんなに可愛らしい女の子監禁しているお前を見ると殺したくなるんだよおお！！！」  
「ひいひい！ごめんなさい！ごめんなさい！もうしません！もうしませんから助けてください。……ひやああああ！！！」

数多のパンチやキックを食らいまくる古谷。今ここに弾力性抜群の人間サンドバッグが誕生した。本来怜次のパンチは人間の頭を一撃で砕いてしまうほどの威力を持っているが、この豚男を一撃で殺してしまうことは怜次にとってはとてもつまらないことだったらしいので、この時彼は『いたぶり殺すこと』だけを考えているの

だった。

「くは………」

古谷はついに意識を失う。そんな古谷と怜次のやり取りを目の前で見ている4人の女子中学生たちは恐怖で震え上がっていた。しかし、その恐怖も一瞬で安心に変わる。

なんと怜次は何も言わずに女子中学生の体に巻きついていて縄をほどいてくれたのだ。

「別にお前らを助けるつもりなんてなかったんだがな、こんな豚男に遊ばれたお前らが可哀そうだと思ったんだ。さあ、逃げろ。」  
女子中学生たちは制服をきちんと着直して、この豚男の家の居間から出ていこうとする。すると1人の女子中学生が出ていく寸前に怜次に向かって深々と頭を下げてお礼を言った。

「本当にありがとうございます!!」

「………フン! 礼言っている暇があったらさっさと逃げろ。」  
怜次の目は泳いでいた。照れているのだろうか。

女子中学生らが家から出ていった後、怜次は古谷の頭にとどめのパンチを食らわせ、殺した。そして遺体を裏庭にある焼却炉で大量の生ごみとともに燃やした。

「もしもし、神奈川へ向かえ。下平の裏にはおそらく中川清がいると見た。行くぞ! 行って俺たちの力を見せつけてやるぞ!」

「はい!」

こんな会話をしてから電話を切り、怜次は歩き始める。

日本最凶暴力団、小笠原組、組長小笠原怜次。

彼の暴走劇が今こうして幕を開ける。



## プロローグ（後書き）

どうも螺子です！

このお話は『Kのブルー』と一緒に連載していく予定です！

どうかよろしく！

## 奴はテメエを怒らせた

2001年9月21日の午後1時ごろ。神奈川県厚木市にある人通りの少ない交差点の一角にある小さな喫茶店『喫茶ねこば』に、1人の男が入店する。

「いらつしやいませ！」

今年で30歳を迎える喫茶ねこばの店長 土井誠どいまことが元気よく挨拶をする。

「おう！」

入店した男の名は中川清。この店の常連客であり、誠の同級生の親友でもあった。

「清か。今日は仕事早く終わつたんだな。二日酔いか？昨日あんなに飲んだからな。」

「ああ、確かに飲みすぎた。というより、飲ませたのお前だろ？」

「何言つてんだ！お前も酔つた勢いで俺にメチャクチャ飲ませたじゃねえか！」

「ははっ……覚えてねえや。」

清は仕事が終わるとほぼ毎日こうしてこの喫茶店にやって来るのだつた。

すると店のキッチンの方から30歳ほどの女性が歩いてくる。

「あら清さん！昨日は大丈夫？」

この女性は誠の妻 土井裕子どいみこである。優美な彼女の姿はまるで30代には見えないほど可愛らしく見える。清は裕子に丁寧な挨拶をする。「あ、裕子さんおはようございます。俺は大丈夫でしたけど、なんかはしゃいじやったみたいなんで、そちらそちらに迷惑かけてませんでしたか？」

「ええ、昨日はいつもと比べてそんなに騒いでいませんでしたよ？」

「あはは、いつもと比べてって……いつもそんなにうるさい

ですか？」

「ええ、そりゃあもう。だから本当にうるさい時は眠れないから私も一緒に飲みに来るじゃないですか。」

「あはは、そういえばそうですね……友恵ちゃんは大丈夫なの？」

「友恵は眠りが深いから大丈夫よ。あの子はどんなに揺さぶっても夜は起きないわ。」

『友恵』とは誠と裕子のまだ幼い娘の名前である。

「そうかそうか。そりゃあ結構なことじゃないか。」

噂をすれば、その友恵が店の中に勢いよく入ってくる。

「ママ〜！ただいまあ！」

短く切られてさっぱりとした短髪の友恵が母親のもとへ走る。友恵は今年で4歳になる。

「あら友恵、どこ行ってたの？」

「こうえん！」

「あらそう！『いってきます』ってちゃんと言わなきゃだめでしょ！」

「ごめんなさい！」

友恵はまるで反省しているようには見えない。清はそんな友恵の元氣そうな顔を見てにつこりと笑い、頭を優しくなでた。

「はははは、友恵ちゃんも元氣だなあ。いつか俺の息子にも会わせてやりてねえな。」

と言いながら清はウーロン茶を飲む。

「清の息子の名前なんて言ったつけ？」

と誠が清に質問する。

「陽太だ。」

「そうだったそうだった。会ってみたいなあ……。今どこにいるんだつけ？」

「ああ、妻と東京に住んでるよ。」

「今度ここに集まるときは奥さんと一緒に息子さんも連れてきてく

れよな。」

「ははは、酒臭くなるから子供はダメなんじゃないかな。」

「問題無い問題ない！いつか陽太君も一緒に俺たちと酒飲むようになるんだから。」

「ははははははは。」

平和だった。とても平和だった。いつものようにこの喫茶ねこばに集まる毎日がだ。

いつものように陽太が入店すると誠との会話が始まり、うるさくなる。うるさくなると裕子が来て、3人でワイワイと楽しい会話が始まる。時に友恵が顔を出し、大人たちをなごませたりもする。そんな毎日はずっと続けばいいなとみんな思っていた。ずっとずっと。そう……あの男が現れるまでは……。

突如、喫茶店の窓ガラスを割り、1人の男が飛び込んできた。

「なんだ！？」

その場にいた人たちは皆、驚き戸惑う。裕子は友恵を抱きかかえて、店の奥へ逃げた。

「誰だお前！！」

誠がその男に怒鳴りつける。するとその男はニヤリと笑い、清たちの方を睨んで名乗った。

「僕は小笠原怜次。小笠原組の組長だ。」

「なんで俺の店のガラス割りやがったんだよ！おい！ふざけんなよ！！」

ただでさえ経営が少し厳しいのに、窓ガラスを割って謝りもしないなんてたまったものじゃない。誠がキレるのも当然だろう。

するとその誠に向かって怜次がものすごいスピードで間合いを詰めて、誠の腰についている短刀を奪い取った。

「な、何をする！」

「クハハハ！」

誠はその短刀を奪い返そうとしたが、怜次は素早く元の位置までさがってしまったので奪い返すことが出来なかった。

「下平勇太郎を知っているな？僕はそいつを探している。居場所を教える。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なぜ教えなければならないんだ？」と清が質問する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・僕たちはただその下平って奴と話がしたいだけだ。下平はお前の仲間なんだろう？だったら早く教えるよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ダメだと言ったら？」

「当然お前らを殺す。」

「そんなことしたら下平に会えなくなるぞ？」

「心配はいらないさ。お前らが死んだらさつき裏口に逃げた女と子供が痛い目見るだけだ。」

「何だと!？」

清はうつろたえはじめた。

「さつさと居場所教える。さあ早く!早く!」

と怜次が言ったそのときだった。

ものすごい銃声が清たちの背後から響いて来たかと思ったら、怜次の左胸に巨大な銃弾が突き刺さった。

「・・・・・・・・・・？」

清も誠も、一瞬何が起きたのか分からなかった。ふと後ろを振り返ると、キッチンの窓の向こう側で友恵と裕子をかばいながら青い銃を構えている、白い髪の男が見えた。

「勇太郎・・・・・・・・・・」

その白い髪の男こそが、怜次の探していた下平勇太郎なのである。彼もまた清や誠と同級生の友人なのだった。

「大丈夫かい？清い、誠お。」

身長が2メートル以上ある勇太郎が店の中に入ってくる。

「あ、ああ・・・・・・・・大丈夫だ。」

「短刀を奪われたが大丈夫だ。」  
大量の血を流し、目を閉じたまま倒れている怜次の右手に持っている短刀を取り返す誠。

「勇太郎、こんなことして大丈夫なのかよ！」

「大丈夫だあ。俺あな、ハングリーブルー隊っていう殺人グループに所属してんだあ。そのうちここに処理班が来るからあ安心しろ。」

「お、お前殺し屋だったのか!？」

「俺あ、ハングリーブルー隊の隊長だぜえ？」

清も誠も言葉を失った。勇太郎は比較的穏やかな性格をしている人間なので、人を殺したりするようにはとても見えない。

ハングリーブルーとは勇太郎の持っている青い銃の名前からきているものであり、隊長が持つことのできる世界にたった一つしかない大型自動拳銃なのだ。

> i 2 7 0 1 8 — 2 4 7 9 <

重量 25 kg で長さ 35 ?、かなり大きく重たい銃だ。勇太郎にはその銃を使うに値した技術と筋力と素質が備わっているからこそこんな銃を使うことが出来るのだ。

10 分後・・・

喫茶店の前に黒いワゴン車を止め、防護服を着た人たちが喫茶店の中で倒れている怜次を回収しに来る。

「こいつ、どこに持っていくんだ？」

「横浜に俺たちハングリーブルーの本部があるんだ。そこで焼却するんだ。」

「・・・・・・そうか・・・・・・。」

清は淡々と恐ろしいことをしゃべっている勇太郎が怖かった。

怜次の回収は3分ほどで終わる。防護服を着た人たちは、いろいろな薬品を使って血を拭きとったりするなどの、一つ一つの作業が手

慣れていた。

「それじゃあ頼むよあ。」

と言った勇太郎は黒いワゴン車に向かって手を振る。

ワゴン車は怜次を乗せて、ゆっくりとしたスピードで横浜に向かって走っていった。

誠たちはその様子を啞然とした様子で見つめる。すると清が勇太郎の手をつかんで喫茶店の中へ引きずり込んだ。

「ちよつと来い！勇太郎！！！」

「な、なんだよ！引つ張るなって、いてててて！！！」

清は少し怒った様子だった。

「どういうことだ！説明しろ！」

カウンター席に座らされた勇太郎は清に怒鳴られる。

「そうだ、俺たちにもちゃんと説明してもらいたいよ。裕子、友恵を部屋に連れて行ってくれ。」

「わかったわ。あとできかせて。」

裕子が友恵を二階の部屋へ連れて行く。

喫茶店の中には清と誠と勇太郎の3人だけが残る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

勇太郎はうつむいたまま何も答えない。

「おい！勇太郎！」

「話してくれよ！お前殺し屋だったのか！？」

「そうだよあ！俺は3年前から殺し屋だ。小笠原組に狙われるようになったのもそのときからだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうして殺し屋なんかになったんだ！？」

「俺は小笠原組を潰したかったんだ。だから殺し屋になった！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

清と誠は、呆れたような表情をする。

「そんなにお前が幼稚な奴だとは思わなかったよ。」

「フン！ほつとけ！言っておくけどな、お前からこの俺に今命を救われたんだからな？礼ぐらい言ってもいいんじゃないか？」

「な！なんだと！？元はと言えばお前が人殺しをしていたせいだつきの男がここに来ちまつたんだろ？」

「ケツ！相変わらず面白くねえ野郎だぜ。お前はよお！」

勇太郎はふてくされたような顔をして、喫茶店から飛び出していた。

「クソ………何なんだよあいつ。いつまでもガキみてえな性格しやがって……」

清はカウンター席のテーブルを何回もたたく。

「………」

この時すでに、平和だったはずの喫茶店に、嫌な空気が入り込み始めていた。

そしてその日の夜。

怜次を乗せたハングリーブルー隊のワゴン車がガードレールを突き破り、とあるコンビニに突っ込むという事件が起きてしまう。ワゴン車はブレーキが壊されていたらしく、ものすごいスピードでコンビニに突っ込んでしまったようだ。当然車体はペシャンコになり、ドライバーは即死する。

直後、そのワゴン車を黒いスーツを着た人たちが囲み、後部座席に寝転んでいる怜次を救出した。

「おい！組長はまだ生きてるか！？」

この黒スーツ集団は小笠原組の組員たちだった。

「大丈夫だ！まだ脈はある！だが意識がない上に、少し応急手当が必要だ！」

「クソ！とにかくこのコンビニにある物で役に立ちそうなものを探し出せ！」



「はい！」

コンビニのレジに立っていた男は腰を抜かして驚き戸惑っている。そして野次馬たちも驚いた顔をしながらどんどん集まってくる。

そんな一般人たちには目もくれず、組員たちはコンビ二内をメチャクチャにしながら組長である怜次に応急手当を施す。

「よし！一応止血だけはした！組の医療班に持っていくぞ！」

小笠原組は非常に大きな暴力団なので医療班を持っていたりもする。怜次は小笠原組の高級車に乗せられて、本部のある新宿へ連れていかれた。

翌日22日の朝。

勇太郎にワゴン車爆破事件の報告がされる事はなかったので、ハン  
グリーブル隊に所属するすべての人たちは『小笠原怜次は死んだ』  
と思いこんでいるのだった。

しかし、怜次は確実に息を吹き返し、組員たちが見守る中、朝日とともに目を覚めたのだった。

[illegible]

下平勇太郎は極悪集団小笠原組組長小笠原怜次を完全に怒らせた。

奴はデメエを怒らせた（後書き）

どうも螺子です。

さあこちらの小説もどんどん盛り上げていきたいです！メッセージお待ちしております！

## アンデッドオペ

2001年10月1日。深夜0時。歌舞伎町。

スーツ姿の小笠原組の組員たちが怜次を先頭にして歌舞伎町の真ん中を堂々と歩く。

「組長、これからどちらへ？」

と若い組員が怜次の耳元で質問する。

「ぎとつてい魏刀亭一家のビルだ。」

と怜次は無表情で答える。

魏刀亭一家とは裏の社会のさまざまな事情や情報を高い値段で売っている情報屋だ。

「情報を買うんですか？」

「……いや買うんじゃない。もらうんだ。」

「しかし魏刀亭はそう簡単に無償で情報をくれるような集団ではありませんよ。」

魏刀亭は金が無い相手に対しては絶対に情報は売らない集団だ。

「クフフフ。よい考えがあるんだよ。」

怜次は不気味な笑みを浮かべた。

その会話から5分が経過した頃、怜次達は魏刀亭一家の所有する3階建の小さなビルの前に到着する。

「失礼します。」

怜次は丁寧なあいさつをしてから扉をあけ、ビルの中に入った。そして階段を3階まで登り歩き、魏刀亭の総長に会う。しかし怜次を見た総長はいきなり怒鳴り散らした。

「ああん！？ テメエらいったい何の用だああ！！」

魏刀亭の総長は60歳くらいの老人だ。和服姿で、あご全体に白いひげを生やしていて、非常に恐ろしい目をしている。怜次は総長を

哀れむような目で睨みながら返答した。

「何キレてんの？情報をもらいに来たんだよ。」

「情報をもらいに来た？あいにくウチはボランティアじゃねえんだ。情報は買わせる主義だ。」

どうやら魏刀亭は情報を無償で提供する気なんて全くないらしい。すると怜次は総長のすぐ目の前まで近寄り、右手で総長の胸ぐらをつかんだ。

「そこをなんとか頼むよ。この通りだからさ。」  
と言いながら総長の顔のすぐ目の前で中指の立った左手を見せつけた。

「き、貴様アアア！！！」

総長は怜次の顔面に右拳を飛ばしたが、怜次はそれを軽々と左手で止めた。

「情報を提供しろ。しないならこのビルにいる君のかわいい部下たちから順番に殺していつてやるよ。」

「ふざけるな！貴様いったいどういつつもりでグフウ！！！」

怒鳴る総長の脇腹に怜次の強烈なパンチが入る。

「るっせえなジジイ！！！」

「く、クソ……………」

怜次が総長の胸ぐらから手を離すと、総長は床にしゃがみ込んだ。

「おいお前ら！このビルにいる奴ら全員ここに集める。」

「はい！」

小笠原組の組員たちは怜次の言われるままに行動する。

「怜次、こんなことしたって俺たちは何も吐かねえぞコノヤロー！」

総長はまた怒鳴り始める。怜次はひざ蹴りを総長のあごに食らわせた。

「うるさいなあ。」

「ぐおお！！！」

総長はあまりの痛さで床じゅう転げ回った。

すると小笠原組の組員たちがビルにいた人たち20人を連れて、部屋に入ってきた。

「おそらくこれで全員です。」

「そうか、じゃあまずお前らここに立て。」

怜次は連れてこられた20人の魏刀亭の組員たちを横一列に並べる。  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

魏刀亭の組員たちは顔中傷だらけだった。小笠原の組員たちに殴られたりしたのだろう。

「はい、じゃあ右の人から1人ずつ質問をしていくから、ちゃんと答えてね。」

怜次の目は鋭くて大きいので、睨まれたものたちは皆震え上がった。  
「まずはお前からだ！早く前に出ろ！」

右端にいた中年男性がビクビクしながら怜次の前に立つ。

「・・・・・・・・・・下平勇太郎知っているな？」

「い、いいえ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怜次は中年男性の返答に対して、失望したような顔をした。事務所に嫌な空気が走った。すると・・・

「殺せ。」

この場にいた人たち全員、怜次のこの言葉に耳を疑った。

「・・・・・・・・・・はい？」

「殺せて言っただよ。こいつ僕の最初の質問に『いいえ』で答えたんだ。もう失格だよ。殺せ。」

「わ、わかりました！」

「ひ、ひいいいいい!？」

中年男性は恐怖のあまり、尿を漏らしながら地面に倒れ込もうとしたところを、銃弾で頭を撃ち抜かれて死んだ。床にバタリと倒れた中年男性の頭から流れる血が部屋中に広がってゆく。

「な、なんてことだ！ふざけるな怜次!!」

総長は恐怖と怒りで体中が震えていた。すると怜次はたった今死んだ中年男性の隣で怯えながら立っている金髪の若い男に指をさした。「そいつも殺せ。」

「はい！」

なぜか金髪の若い男も頭を撃たれてしまい、血を噴き出しながら仰向けに倒れた。総長は信じられないといった顔で2つの死体を見る。「総長さん。あんたもバカじゃないんだから分かるよね？これ以上なんか余計なこと言ったらここで並んでいる人たちどんどん死んでいくよ？」

「・・・・・・・・・・ちつ、クソオ分かったよ。情報を提供する。だからもう銃をしまってくれ。」

総長は両手をあげた。理屈なんて通用しないのがヤクザだ。『気に入らなければ殺す』という考えを真面目な顔して持っている彼らにとって、人を1人殺すことなんて朝飯前だということを総長は知っていた。

「クフフフフ。いいだろう。じゃあまず最初の質問だ。下平勇太郎を知っているな？」

「ああ。ハングリーブルー隊っていう殺人集団の隊長だ。」

「そいつの持っている銃。あれはなんだ？」

「・・・・・・・・あの銃はその集団と同じ名前、ハングリーブルーだ。破壊力、強度ともに世界一の拳銃だ。誰が造ったかまでは分かんが、相当の腕力と技術が無くてはあの銃を使うことなんてできない。」

「・・・・・・・・・・そうか。」

「おい！まさか質問ってそれだけなのか？」

「いやいや、本題はこれからだ。」

怜次は煙草をくわえて火をつけながら、近くにあったパイプ椅子に座る。

「なんだよ本題って。」

と総長は恐る恐る質問した。怜次は一度ゆっくりと煙を天井にはい

てからその質問に答えた。

アンデッドオベ  
「不死身化手術についてだ。」

「なんだと!？」

総長は驚くと同時に、怜次の人格を疑った。

「その手術が出来る人間を探している。」

「貴様……バケモノにでもなるのか!？」

「そうだ。僕はハングリーブルーに対抗するためにバケモノになる。」

「

怜次は本気だった。

アンデッドオベ  
「そ、そんな。言っておくが不死身化手術は麻酔を使わないから気が狂いそうになるような痛みを伴うぞ。それにな、成功する確率は

極めて低い手術だ。」

「そんなことくらい分かっている。手術できる奴を知っているならさっさと手配してくれ。」

「………まあい。分かったよ。」

総長は携帯電話を手に取り、部屋の隅に置いてあるメモ帳をめくりながら、電話番号を探し始める。

「今日のところは失礼する。お前らはここに残れ。総長が余計な真似したら、そこに並んでいる奴を右から順番に殺していくんだ。分かったな。」

「はい!」

怜次はゆっくりと歩きながら、魏刀亭の建物を後にした。

翌朝10月2日朝8時。

「組長!おはようございます!」

小笠原組員が怜次に元気よく挨拶をする。

「うんおはよう。見つかったか?」

アンデッドオベ  
「はい。今から魏刀亭の車で不死身化手術が出来る奴の場所に連れ

てってもらつとところです。」

「よし、行くぞ！」

「はい！」

怜次は魏刀亭一家の所有するリムジンに乗り込み、神奈川県の川崎市に連れていかれた。

30分ほどで目的地に到着する。

「ここです。」

そこにはまるで廃墟のようなビルが立っていた。

「ここで本当に大丈夫なのか？」

「はい。このビルの地下に手術室があります。」

総長と怜次を含めた10人はそのビルの中に入り、地下へ続く階段を下つていった。

地下にはバスケット並みの広さの薄暗い部屋があり、その部屋の真ん中には手術用ベッドがポツンと置かれていた。

するとその薄暗い部屋の奥から、白衣を着た顔色の悪い40歳ほどの女が歩いてきた。

「あんたが依頼人ね。小笠原組の組長さんだっけ？」

「小笠原怜次だ。」

「よろしく。私は小倉久美だ。おぐらくみ あんた、本当に不死身アンデッドオベ化手術やるの？」

「ああ。」

「私はね、今まで10人その手術をやったけど、全員失敗したよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それでもこの手術をやる？」

「ああ。まア失敗した時にはそこにいる俺の部下がお前を殺すから



な。」

怜次の目に、迷いは全くなかった。どうしてそう思えるのかが不思議に思った久美は、さらに怜次に質問する。

「どうしてこんな手術をしたいと思ったの？」

すると怜次は上半身の衣類を脱ぎ捨てて、左胸にくつきりと残った銃弾の傷跡を見せつけながらこう答えた。

「この傷を見る。これはどんなことをしても消すことは絶対にできないらしい。だから僕はこの傷をつけた奴に復讐をしたいんだ。」

「復讐するためなの？」

「ああ。けどただ殺りかえすだけじゃだめだ。僕はこの傷が無くなるまであの青い銃を持つ人間と戦いたいんだ。永久に彼らに復讐し続けるんだ！」

『この傷が無くなるまで』というのはつまり、『永久とわに』という意味なのだ。怜次の思考はすでにこの時、人間ではなくなっていた。

そして今、その永久とわを手に入れるための手術が始まり、身体までも人間では無くなるうとしていた。

「じゃあその手術台に寝て。……………いい？麻酔は一切使わずに心臓をいじるから、ものすごい痛みを感じると思ってから覚悟してね。」

「ああ。」

怜次の胸にメスが入る。不死身化手術が始まったのだ。始まってしまったのだ。ハングリーブルーを持つ人間たちと、永久とわに戦うために。

## 礼儀を重んじるバケモノ

10月3日。昼ごろ。

歌舞伎町に小笠原組が帰ってきた。他の組のヤクザ達は当然ざわつき始める。

「お、小笠原組がいるぞ？そっぴえばあそこの組長、不死身化手術をやっちまったらしいぜ？」

「マジかよ！それで？成功したのか？」

「だってあそこにいるってことは、成功したってことだろ？」

小笠原怜次は確かに、小笠原組の集団の先頭にいた。

すると1人の茶髪のヤクザが小笠原怜次の正面に立った。

「小笠原組だな？魏刀亭一家を皆殺しにしたらしいじゃねえか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怜次も他の組員も何も答えない。

「おい！聞いてんのか！？あとな、お前ら4つの組に命狙われてんだぜ？魏刀亭が結構雇ったんだ。」

魏刀亭一家は非常に大きな情報屋だ。だから多くのヤクザと関係をもっているため、ピンチになれば助っ人を頼むということもできるのだ。魏刀亭一家はどうやら4つの組に、小笠原組を潰すように命令したのだった。

「それが・・・・・・・・どうした？」

と小さくて低い声で怜次は言った。すると茶髪のヤクザはキレた。

「・・・・・・・・カッコつけてんじゃねえぞ！！」

ついに怜次に向かって拳が飛んだ。とてもスピードのある良いスト

レートパンチだった。普通人間ならよけようとするだろう。格闘技術の高い人ほどその『よける』という能力は高いはずだ。しかし、怜次はその拳をよけようとは全くしなかった。むしろ目を大きく開けて、その拳に向かって顔面を差し出したのだ。

骨を突き破って体にめり込んだような音とともに、怜次は地面に倒れた。歌舞伎町はさらにざわめく。

「よっしゃ！殺せ殺せ！小笠原そいつは俺たちの敵だ！さっさと殺せ！とどめだ！とどめをさせ！」

歌舞伎町の中心部に、他のヤクザ達が集まってくる。小笠原組はいろいろな組から恨みを買っている集団なので、こういった状況下に置かれた時には敵が多い。しかし、小笠原組の組員たちは、全く動じる様子もなく、ただ倒れる怜次の姿を無表情で見つめていた。

大騒ぎするヤクザ達。とどめを刺そうとするヤクザ達。歌舞伎町にたくさんヤクザたちの罵声が響いている。しかし突然、その罵声と騒ぎが止まった。

突然だった。まるでボリウムの螺子ねじを一気にゼロにしたかのよう

に。  
「・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

歌舞伎町が二いたヤクザ達が全員黙った。そしてその原因はすべて怜次にある。なんと怜次は、奇怪なオーラを全身から出して、辺りの空気を歪ませながら、不気味な笑みを浮かべて立ちあがったのだ。

「なんだ！？あいつの周りだけ空間が歪んでいるぞ！？」

空間のゆがみにより、物質の秩序が乱れたからなのか、怜次の立っている場所のアスファルトだけが、バキバキという音を立てながら

砕けてゆく。

ここにいる誰もが驚き戸惑った。

「ば、バケモノだ。」

「しかも傷一つないぞ!？」

「おい! 誰かこいつを殺せ!」

先ほどまで威勢だけは良かったヤクザ達も、こんなバケモノを前にすれば、他人のフリもしたくなる。

「小笠原組の眼前に、丸腰で立った覚悟、努力。素晴らしいじゃないか! 僕は君らを敵と認める。さあ!」

怜次はこう言うと同時に、茶髪のヤクザの首を、片手で握りつぶした。

「くはあ!！」

怜次は大量の返り血を浴びながら、狂ったように笑う。周りでそれを見ていたヤクザ達は一斉に武器を構えた。

「動くんじゃねえ! それ以上何かやったら、テメエらぶち殺すぞゴラア!！」

「そうだそうだ! 俺たちは小笠原組なんか怖くねえぞ!」  
再び響き始める罵声。怒声。

「テメエ! まさか俺たちと戦争するつてのか!？」

と言ったあるヤクザに対して、怜次は笑いながらこう答えた。

「お前らが千人いようが百万人いようが、僕の眼前に立ちふさがる奴はみんな敵だ。本気で戦えよ。それが礼儀だろ!？」

その瞬間、小笠原組の組員たちが一斉に銃を構えて、周りにいたヤクザ達を撃ち殺し始めた。

歌舞伎町に銃声が鳴り響く。次々と倒れてゆくヤクザ達。辺りは騒然となった。



## 狂人

アンデッドオベ  
怜次の不死身化手術は成功した。そして、手術をした久美を殺し、  
周りで見ていた魏刀亭の組員たちを殺し、今ここでたくさんのヤク  
ザ達を殺した。

「クツフツフツフツフッ！！！！」

怜次の甲高い笑い声が歌舞伎町一番街に響き渡る。

不死身になった怜次の心には、恐怖というものは存在しなかった。

怜次は道端に転がっている死体をまたぎながら、事務所へ向かって  
歩き始める。

「組長、帰りますか？」

「うん。今日はもういいや。死体の処理頼むぞ。」

「はい！」

組員たちは一斉に死体の処理を始めた。スプレーを使って血を拭き  
とり、死体を袋に入れて車に乗せる。

死体処理は1時間ほどで終了した。

翌日10月4日。

日もまだ昇らぬ午前3時。西新宿七丁目。6階建てのオフィスビル、  
通称『小笠原ビル』の最上階にある会議室に、小笠原組の組員たち  
が集まる。

怜次は真剣な表情で会議を始めた。

「僕らはたくさんのヤクザの敵になった。覚悟だけはしてしてい  
る。眼前に立ちふさがった奴は速攻殺せ。下平と戦う前に、他のヤ  
クザどもを片付けるぞ。」

「はい！」

「だがこれだけは覚えていてほしい。僕らは決して不利な状況下に

は無い！組員の数は確かに敵の数に負けるかもしれない。だが殺意と狂気だけはどのヤクザよりも僕たちの方が上だ。命を惜しまずにどどんぶつかってゆけ。」

「はい！」

「フン、いいだろう。ではまず日本のヤクザ界を仕切ってる倭将豹弟団を潰そうか。さあ行け。夜が明ける前に倭将豹弟団の核となる人物を全員殺せ。皆殺しだ！！」

と怜次が言い放つと、若い組員が怜次に質問をした。

「あの、俺たちを狙っているのは4つの組です。なのにどうしてヤクザの取締役を攻撃するのですか？」

「分からのか？僕たちは昨日あれだけ好き勝手に人を殺したんだ。どうせ倭将豹弟団もそのうち僕らに罰を与えに来るんだよ。そうなるのは面倒くせえだろ？だからやられる前に殺るんだ！」

「あ………はい。」

その若い組員は改めて怜次の恐ろしさを実感した。

つまり怜次が倭将豹弟団を攻撃するように命令した理由は『面倒くせえ』なのだ。まさに狂人である。

「さあ行け！」

「はい！」

20人ほどの組員たちは一斉に会議室から出ていった。

会議室には怜次と側近の城嶋健介じょうしまけんすけだけが残った。

「クフフフフ！さて、倭将豹弟団の制圧の方はあいつらに任せて僕は僕の仕事を終わらせるかな。」

「組長？いったいどちらへ？」

「教会だ。城嶋、車を出してくれ。」

怜次と城嶋も会議室から出ていった。

城嶋は白い髪の毛で、白いひげを伸ばしている執事のような老人だ。今年で60歳。戦闘時には鎖のついたブーメランを投げて戦う。そ

んな城嶋に丁寧案内されながら、怜次はリムジンに乗り込んだ。

「組長、ステイパンノ教会でよろしいですね？」

「ああそうだ。」

ステイパンノ教会は日本にあるカトリック教会の中ではかなり大きい部類に入るものなのだが、『武装教会』と呼ばれるほど、狂った信者たちがいることで有名になってしまっている。

「やっとなあそのバカどもを皆殺しにする日が来ましたね。」

と城嶋はニヤついた顔で言う。怜次もニヤついた顔でその質問に答えた。

「クツフツフツフ！まだ皆殺しにするわけではないよ。とりあえず神父の柄さらっていろいろ吐かせよう。抵抗するシスターがいたら、皆殺しだけだな。クウフフフフフ！！！」

「あそこのシスターどもは神父に従順です。ですから神父の出方次第ですね。」

怜次と城嶋の乗ったリムジンは30分ほどでステイパンノ教会に到着した。

大きな門をゆっくり開ける。敷地には4つほど建物が並んでいたが、怜次と城嶋は一番大きな木造の建物の扉をたたいた。

「ごめんくださいーい！」

こんな朝早くに、誰も起きているはず無いだろうと一瞬思ったりもしたが、近くにある窓ガラスからたくさんのシスターたちのシルエットが見えた。

「なんででしょう？」

怜次達を出迎えたのは外国人の女性だった。黒い修道服がよく似合っていた。

「神父様はどこにいますか？」

と城嶋が質問する。

「中におられますノデ、静かにお入りください。」



「フン。そうか。ではお邪魔させていただく。城嶋はここで待っている。」

「かしこまりまシタ。」

怜次は少しニヤついた顔で教会の中に入っていった。

教会には黒い服を着たシスターたちが全員巨大な十字架に向かって祈りをささげていた。怜次はその横をズラズ力と歩いていく。

すると、怜次の背後に1人の男が立った。

「おい貴様、神の御前だぞ。もつと静かに歩け。」

怜次はゆっくりと振り返り、その男に挨拶をした。

「どうも久しぶりですね神父様。」

「あ・・・あああ！！お、お前は！！！」

神父は突然驚いた表情を見せる。シスターたちもその神父を見て戸惑い始める。

「そんなに驚かないでくださいよ。あなたには聞かなきゃなんねえことがいっぱいあるんだよ。」

「いったい何を聞きたいんだ！！！」

「それは事務所で聞くとしよう。さあ来い。」

怜次は神父の手を引っ張って教会から出ていこうとした。しかし神父はその手を振り払う。

「ふざけるな！なぜ私が貴様についていかなくてはならんのだ！」

「だから、聞きたいことがあるって言うってんだろ？」

「それはここで聞けばいいことウグウ！！！」

神父の腹に怜次のパンチが入った。神父は床に倒れ込んだ。周りにいたシスターたちが一斉に怜次に向かって銃を構えた。

「クッフッフッフ。うるせえ神父に武装シスターか、『神罰』という名目でたくさんの人たちを殺してきたんだろ？」

「シスター達よ！ここで武器を使ってはならぬ！神の御前であるウドウ！！！」

床に這いつくばっている神父の背中に怜次のかかと落としが直撃す

る。

「うるせえなあ。さっさとついてこいよ。」

「やめろ！引つ張るな！やめろおお！！」

引きずられる神父はまるで子供のように暴れまわる。すると怜次は神父の顔面に強烈なフックを食らわせて、神父のあごをズレさせた。  
「お前がこちらに來ないなら、ここにいるかわいいシスターちゃんたちを殺すことになるけどいいのかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あごがズレてしまった神父はまともに言葉をしゃべることが出来ない。神父は強引にリムジンに乘せられて、事務所へと向かわされるのだった。

## 止まらぬ暴走

神父が事務所に連れてこられた理由は、神父がハングリーブルー隊の一員であるという情報が怜次の耳に入ったからなのだ。

「神父様、ハングリーブルー隊の情報教える。」

「……んがー……フンゴー……」

神父はあごがズレてしまっているの、まともに言葉をしゃべることが出来ない。すると怜次はさつきとは逆の方向からあごに拳を当てた。

「痛ええええー!!」

神父のあごはゴキゴキという音とともに、元の形に戻った。しかし、ものすごい激痛を伴ったようだ。

「さあしゃべれるようになった！もう一度質問する。ハングリーブルー隊の情報を教えるよ。基地はどこだ？どれくらいの規模で活動しているんだ？」

「………私は何も知らない………」

「お前死にたいのか!？」

怜次は神父の顔面に強烈な頭突きを食らわせた。

「ぐわあああ!!」

鼻が折れてしまい、大量の鼻血が吹き出る。

「この間下平勇太郎の逃走に手を貸しただろ？」

「手を貸した？車を出したただけだ！私は全く殺しとかそういうのは関わっていないから基地とかの情報は全く知らないんフブウ!!」

怜次は必死にしゃべる神父の脇腹に回し蹴りを食らわせる。神父は横に吹っ飛んだ。

「車を出したただけだ？その車はどこから持ってきたんだ？」

「………」

神父はついに黙り込んでしまう。

「黙り込むつもりか？」

「・・・・・・・・・・」

「そうかそうか。ならとっておきのゴウモンを披露しようか。」

「ゴウモン!?」

神父の顔から汗が染みでてくる。

「僕らはマチバリって呼んでいるんだ。」

「な・・・・・・・・何だよ・・・・・・・・マチバリって・・・・・・・・・・」

怖くて怖くて仕方がない神父は、体をガタガタと震えさせながら事務所の外へ逃げようとする。しかし怜次は神父のすねに蹴りをお見舞いさせて動きを止めた。

「待ち針っていうのは布とかをおさえておくための針だ。それと同じで、お前の体をこの長い針でその壁におさえつけるんだよ。」

怜次は30?ほどの細い針を神父に見せつけた。

「ま・・・・・・・・まさか・・・・・・・・体に針をさすのか!?」

「そうだよ。大丈夫だよ安心して!臓器とかには刺さないから。」

「やめてくれ!話す!話すからその針をしまつてくれ!」

ついに神父は白状した。しかし・・・・・・・・

「おうそうか!でも焦らした罰としてこの一本だけは刺させてもらうぞ?」

「そ、そんな!ヤダ!やめろおおおお!!!!」

神父は暴れまわる。

「うるせえな・・・・・・・・。オルアアア!!!!」

針は神父の右頬から左頬へ貫通し、壁に深々と刺さった。

「うえああああああああ!!!!」

怜次はすぐにその針を抜いて、神父の髪の毛をつかんだ。

「さあ言えよ!基地はどこだ!」

「神奈川県厚木市にあるアルチョっていう大きな工場があるんだ。そこが奴らの拠点だ。」

「クフフフフ。そうか。」

怜次はマジックペンで手の甲に『アルチョ』と書いた。



「撃つぞ！止まれ！止まれえ！」

「撃てよ……さあ！」

怜次は両手を大きく広げる。

シスターはお望み通り、怜次に銃弾をぶち込んだ。しかし、当然怜次に銃弾は効かない。何発撃っても、何発撃っても結果は同じ。怜次の傷は一瞬にして回復してしまう。

「もう銃弾が……無い！」

シスターは怯え、立っていることすらできなくなり、その場につひつひ跪いた。

「女を殴るのはあんまり好きじゃないんだよなあ。城嶋！お前こいつの処理を頼む。」

「かしこまりました。」

城嶋はブーメランを投げて、シスターの首を刈り取った。

怜次は隠れている他のシスターたちに警告を与えた。

「おいシスターども！ここにいる女みたいにならなくては、はやく姿を現せ！僕には銃弾はきかぬ。抵抗しても無駄だ！」

すると怜次の背後に1人の青い目をしたシスターが笑いながら現れた。

「ふふふふふふ……あんた少し私たちを甘く見ているよね。」

「……？」

「私はシスター・リリユウ。私はあんたみたいなのを死刑台における役目を持っているの。」

リリユウは3メートルほどの高さがある木製の十字架を担いでいた。「この十字架はグラビティクロスと言うの。これさえあればどんな奴でも死刑が執行できるのよ。」

「フツ！やってみればいいさ。」

と怜次が言くと、リリユウはグラビティクロスを地面に刺して、ブツブツと呪文を唱えた。すると怜次の体がその十字架に吸い込まれ

ていき、ぴつたりとその十字架に張り付いてしまった。

「く、組長！」

組員たちがあわて始める。

「ふふふふふふ。さあ神罰を受けよ！」

怜次の体に大量の鎖が巻きついていき、両手には無数の釘がうちこまれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怜次は下を向いたまま何もしゃべらない。

「組長！お逃げください！」

と言いながら、城嶋はブーメランをリリユウに投げようとした。しかし、周りの木々の陰からたくさんのシスターたちが機関銃を構えながら城嶋を含む10人ほどの組員たちを囲んでしまい身動きが取れなくなってしまった。

「あははははは！小笠原組も大したことないわね。あんたは一生その十字架に張り付けられながら過ごすのよ。」

リリユウの高らかな笑い声が教会の庭中に響く。しかし、その笑い声は怜次の笑い声にかき消されてしまう。

「クフフフフフフ。」

「ん！？」

張り付けられて、血まみれになりながらも笑顔を浮かべる怜次に、辺りの人間たちは驚いた。

「何がおかしい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・クフフフフハハハ！！こんなもので僕を仕留めたつもりでいるお前たちがおかしくておかしくて仕方がねえんだよ！」

「はあ！？あんた自分の状況理解しなさいよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それはこっちのセリフだ！」

「え！？」

すると怜次は両腕に力を入れ始める。そしてなんと、身体に巻きつ

いている鎖や、刺さっている釘などを力ずくで破壊してしまったのだ。

「んんんんんんんのおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお！！！！！！！！！！」

怜次の雄叫びとともに鎖や釘は砕けながら地面に落ちていった。

「な．．．．．なんて力バウ．．．．．鎖を砕くなんて．．．．．」

「  
リリユウは怯えた表情を浮かべ、思わず後ずさりをしてしまう。その隙について、他の組員たちが反撃を始める。

「食らええ！」

「うおおおおお！」

銃声が響き渡る。そして、5分ほどでほとんどのシスターたちは地面に倒れ込んだ。

この場所には小笠原組とリリユウだけが生き残った。

「．．．．．クソオ．．．．．」

リリユウは跪く。そんなリリユウに怜次はゆっくりと近づいていく。  
「その十字架は重力で人を引き付ける効果がある見てえだな。中々惑わせてくれるじゃないか。だが礼儀が足りないな。僕の前に立つときはもっと自信満々でなきゃダメだ。僕を失望させるなよ小娘。」

と怜次が言うと、突然リリユウは泣き始め、懷から銃を取り出した。

「あんたなんかに．．．．．殺されてたまるかあああ！！」

リリユウは自分の頭に銃を突きつけて、引き金を引いた。

「自殺か．．．．．。僕らに殺されるよりも、自分で死ぬことを選ぶとは．．．．．」

怜次は目を開けながら死に絶えたリリユウのまぶたをゆっくりと閉じてから、教会の中に入っていった。



「残りのシスターどもを片付けるぞ！」

怜次はいつたい何のためにシスターどもを攻撃しているのだろうか。

ただのストレス発散か？それとも何か理由があるのだろうか。

それはまだ組員たちすら知らないことだった。

## 高級肉を食う人々

喫茶ねこばばのカウンター席に、清と勇太郎が座る。

「なあ勇太郎、小笠原怜次ってまだ死んでねえみたいだぞ？やばくないか？」

「ああやべえよ。ツメが甘かった。このままじゃまたここに奴らが来るな。」

と勇太郎はのん気な顔で言う。

「ふざけんなよ！お前俺たちを巻き込むつもりか？」

「いやいや、そんなことはしないよ。俺は殺し屋だ。ターゲットしか殺さない。」

「そういうことを言ってんじゃない！俺たちがとばかりを食らわないように気をつけろって言ってんだ！」

清はやはり怒っていた。

「安心しとけ、喫茶ねこばばには指一本触れさせねえ！」

勇太郎は強気だったが、清たちにとっては少し不安だった。

「小笠原怜次はすぐに人を殺しまう狂人だぞ？お前そんな奴に狙われているんだからな？気をつけろよ！」

「大丈夫だつて！小笠原組は今暴力団そのものを支配しようとしているんだ。俺たちと戦うためにな！だからあいつらには俺たちと戦う前にまず倒さなきゃいけねえ相手がいるんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんなんだそれ？」

「知らねえのか？・・・・・・・・『野犬集団』とか『腹減り団』とか呼ばれている、桐谷組きりたにだ。」

「桐谷組？」

清には全く覚えのない響きだった。

「本当に知らねえのか！？」

勇太郎は驚いた様子だった。

「知らん！」

と清はキツパリと返答する。

「桐谷組も一応暴力団なんだが、他から見ればあれは乞食集團いじつきだな。いつもいつも飢えに苦しみながら行動している奴らなんだ。」

「こ、乞食？ そんなの小笠原組の勢力にはかなわないだろ？」

「いやいや、分からんぞ？ 桐谷組は数よりも実力がある集團だからなあ。」

「実力？」

「桐谷組の餌は人間の肉なんだ。」

清は驚いた。

「に、人間………。人を食らうのか？」

「ああ、あれは限りなく人間に近い肉食獣の集まりだ。」

ハングリーブルー隊の隊長である勇太郎ですら恐れている桐谷組。彼らは人を食らうバケモノ集團なのだ。しかしバケモノという点では小笠原組も同じだ。

小笠原組が暴力団を支配しようとしている以上、バケモノ集團同士の衝突を避けることはできないだろう。

「はあ………。なんでもいいけどよ、俺たちはあんまりそういうのに関わりたくねえんだ。ちゃんと俺たちへの気遣いも頼むよ！」

と清が言うとき突然勇太郎は不気味な笑みを浮かべながら話し始めた。

「……………。そういうわけにやいかん。」

「何！？」

「小笠原組と桐谷組が戦って、もしも桐谷組が負けるようなら、俺もお前らも喫茶ねこばばも相当あぶねえ状況におかれるだろうな。」

すると清は勇太郎の胸ぐらをつかみ、恐ろしい表情で怒鳴り始めた。「ふざけんな――！俺や誠はな、この喫茶ねこばばが大好きなんだ！ここは俺たちにとって安らぎの場なんだ！そこをどうして変な連中に奪われなくちゃならねえんだ！ふざけるなよ、なんとかしろよ！」

「わ、分かった分かった！」

勇太郎は必死に清の怒りをしずめる。

しかし、勇太郎の言っていることは真実だった。

桐谷組が負けるといふことは、暴力団そのものが負けると同じことになるのだった。暴力団すべてを牛耳った小笠原組にやるべきことはただ一つ、『ハングリーブルー隊を潰す』ことだ。

そんなことをされれば、喫茶ねこばにも暴力団が侵入してくるだろう。そうすれば清たちの平和な日常は無くなってしまうだろう。ヤクザが関わる日常。暴力におびえる毎日。喫茶店にこぼれおちる涙、血、ヨダレ、精液。

想像もつかないほど恐ろしい未来。そんな未来が嫌だから、清はただ勇太郎に八つ当たりをする。

「ふざけるな……ふざけるな！！なんとかしろよおおおお！！！」

そんなことをしているうちに、清たちの運命を決める戦いは始まろうとしていた。

2001年10月4日夜21時。

アメ横のすぐ近くにある山手線の通る橋の下。ここは薄暗く、ホー  
ムレスたちの住処にもなっていたりする。そこにいる集団こそが桐  
谷組だ。

「グルルルルルルル……」  
まるで野犬のような人間。

どこからか連れてきた女の体を鋭い歯で食いちぎる。これが今晚の餌なのだろう。

「親分、まだ食べ足りないようなら狩ってきますが、どうしますか？」

「……………狩ってこい……………まだ食い足りぬ。」

「はい！」

桐谷組の人数は大体20人くらい。そのうち一人は組長である桐谷龍次だ。年齢は大体30代半ばくらい。スキンヘッドでひげを長く伸ばしている。

「親分！狩ってきましたよ！男1つと女2つです！」

「よし、食うぞ……………」

舌舐めずりをしながら、桐谷は笑う。

すると桐谷の全身から大量の毛が生え始め、皮膚が黒くなり、目が赤くなり、バケモノに変化する<sup>へんげ</sup>。

そして桐谷はハイエナのようにその3つの人間を食いつくした。

桐谷組の人間は、皆人間の肉を食らう。しかし生で食らうのは組長だけ。他の組員たちは焼いたりゆでたりしないと食うことはできない。

人間の肉はどんな高級牛肉や鶏肉よりも美味いらしい。やわらかくてジューシーで油も多い。

しかし、そんなものを食べられるのは桐谷組のような狂った奴らだけだ。

そんな奴らの目の前に、1人の男が舞い降りた。その男こそ、今まさに日本のヤクザ界を牛耳ろうとしている集団の組長、小笠原怜次なのだった。

「クツフフフフフフ！！」

怜次の笑い声が橋の下に響く……………

## 心臓

桐谷組らが感じる危険。これは本能から来るものだっただ。

「なんだお前は？」

と桐谷は恐る恐る聞く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・クフフフフ。小笠原怜次つてもんだ。」

「小笠原？・・・・・・・・・・一体何の用だ？」

「単刀直入に言えばお前らを殺しに来たのさ。」

「・・・・・・・・そうか。・・・・・・・・全員構える！！」

桐谷組全員が戦闘態勢に入る。そんな彼らに怜次は1つ質問をした。

「なぜ殺しに来たのか理由を聞かないのか？」

「フン！俺たちに理由なんてものが必要なのか？ヤクザに理由なんていらねえ。ただ俺たちはお前を殺してえただけだ！」

「クツフツフツフツフツフツフ！！そうかそうか！面白い！」

怜次はワイシャツとジャケットをいつぺんに脱ぎ、上半身裸になった状態で戦闘態勢に入り、桐谷に向かって飛びかかった。

「く、組長を守れ！」

桐谷組の組員たちが一斉に桐谷龍次の前に立ちはだかり、組長を守ろうとする。

「邪魔だ！」

刹那、組員たちの体は怜次の持つ何かに斬られていた。しかし、不思議なことに組員たちは痛みを全く感じなかった。

（・・・・・・・・・・？）

そして、ゆっくりと自分の体を見回した時、組員たちは痛みを感じない理由を知った。

(体が・・・・・・・・・・無い・・・・・・・・・・)

そう・・・・・・・・、組員たちは一瞬にして首を斬られていたのだ！

怜次が手をとがらせれば、一瞬にしてそれは刃物になってしまう。  
組員たちの首は、目にもとまらぬ速さで動いた怜次の手に斬られていたのだった。

橋の下に大量の血が流れ、たくさんの首が転がった。

桐谷は驚いた表情を見せる。

「な・・・・・・・・なんだと!?!」

「クフフフフ！さあお前で最後だ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怜次は桐谷に向かって加速した。ものすごい速さだった。30メートルほどの間合いを、0.5秒にも満たない速さで詰めてしまう。

しかし、速さでは桐谷も負けてはいなかった。

桐谷は上に素早く飛び上がり、向かってくる怜次の頭上から、蹴り技を繰り出そうとした。

「オルア!」

しかし怜次は桐谷の足をキャッチし、そのまま橋の柱に向かって投げ飛ばした。

「ぐあ!」

桐谷は柱に強くたたきつけられる。

「クフフフフ！さすが桐谷組の組長だ。それなりに身軽だな。だが、まだまだ未熟者だ。」

「・・・・・・・・・・黙れ!」

「あ?」



「この俺にケンカを売ったことを後悔させてやる！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

桐谷の眼の色が突然真っ赤になった。

「ぬをおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

ものすごい奇声とともに、桐谷の体に変化してゆく。全身の皮膚が黒くなり、手足の爪が鋭くなり、歯は牙に変わり、何もなかった頭皮に大量の黒い髪の毛が生えた。桐谷はものすごい殺気を放つバケモノになったのだ。

「・・・・・・・・・・なんだ？」

これにはさすがの怜次も驚いてしまう。

「キシイイイイイイアアアアアアアアアア！！！」

鼓膜を破りそうになる高い叫び声が、東京の街に響く。そして、桐谷はものすごいスピードで怜次に向かって飛び、鋭い爪で怜次の首を刈った。

怜次の頭が地面にたたきつけられる。怜次の首の切り口から大量の血が吹き出る。

普通の人間なら死んでいるだろう。しかし、怜次は普通の人間ではない。不死身の人間だ。

当然、逆再生のように元の姿に戻ってしまう。

「クフフフフフフ。」

「グルルルルルルルル。」

怜次の回復能力に驚いた桐谷は、威嚇するように唸る。

「この状況、我に一片の不利なし！故に我、ここにあり！」

と言い放った怜次は、地面に落ちていた桐谷組の組員の首を桐谷に向かって蹴り飛ばした。桐谷はそれを難なくかわし、怜次に向かって走った。

怜次も桐谷に向かって走り始める。

そして、この橋の下で怜次の強烈なパンチと、桐谷の鋭い爪が激突し、真っ赤な火花を散らす。

直後、桐谷の足を払った怜次は、バランスを崩した桐谷の顔面にもう一度拳を飛ばした。すると桐谷は大きく口を開けて、その拳を噛みちぎった。

「ん!？」

「ペツ! キシイイイイイ! ! ! ! !」

怜次の拳から噴き出る血で顔中真っ赤になってしまった桐谷だったが、よろけてしまった怜次の隙を見逃さずに、ものすごい速さで怜次の心臓に右手の鋭い爪を突き刺した。

「!!!!!!」

アンデッドオベ

不死身化手術は心臓を改造して回復能力をバケモノレベルにまで上昇させてしまうもの。しかしその心臓そのものを破壊してしまえば、その回復能力も無くなってしまうのだ。

心臓を破壊されてしまった怜次は真上を向いたまま静止する。

「スウウウウイイイイイイイイイイイイイイイイ! ! !」

桐谷はそこへさらに攻撃を仕掛ける。鋭い爪で怜次の顔を引っ掻いた。怜次は後ろへ大きく飛ばされて、橋の柱にたたきつけられて動かなくなった。

辺りから殺気が消えて、橋の下に山手線の通る音が響き渡る。桐谷は元の姿に戻った。

「フウ．．．．．小笠原組の組長、小笠原怜次か．．．．．  
．．．。大した奴じゃねえな。」

と動かなくなつた怜次に向かって言い放ち、顔に一日をハンカチで拭きとりながらその場を後にしようとした桐谷。

そのとき．．．．．

桐谷は再び蘇るものすごい殺気を全身で感じ取った。

「!!!!!!!!!!」

## 毒と傷

「クフフフフフフフフ……」  
橋の下に響く怜次特有の笑い声。

「……………!?!」

生きる上で絶対に必要な心臓。それを見事に貫かれたにもかかわらず、ケラケラと笑いながら立ち上がる怜次を見た桐谷は思わず言葉を失った。

「急所を突くのは狩人の基本だ。確かにほとんどの生命体は心臓が急所だから、心臓を見事に撃ち抜いた君は狩人としては素晴らしいよ。だが、僕の急所は心臓では無い!」

「……………心臓が急所じゃないなら、いったいどこが急所なのだ!」

「クツフツフ。そんなことを敵に言うバカはいないだろう? まあ一つ言えることと言えば、僕に急所なんてものはない!」

「な、なんだと!?!」

桐谷は驚きのあまり、思わず後ずさりを始めてしまう。

「クフフフフフ。」

怜次は桐谷に向かってゆっくりと歩き始める。

「ク、クソオオオオ!!!!」

桐谷はもう一度爪を立てて、怜次に向かって走っていった。今度の攻撃は先ほどとは違い、爪に猛毒を仕込んでいた。

「……………毒?」

「そうだ! 食らえ!」

猛毒をまとった桐谷の爪が怜次の顔を引っ搔いた。

「……………」

怜次の顔に3本の傷がついてしまう。回復能力は桐谷の爪に仕込まれていた猛毒のせいで完全に妨げられてしまっていた。

顔に猛毒を撃ち込めれば大概の人間は死んでしまつらしい。桐谷は  
今度こそは倒したと思つていたのだが……

「ぐはぁ！」

桐谷は突然胸をおさえながら地面に倒れ込んだ。

「クフフフフフ！」

怜次は顔中血まみれになりながらも、不気味な笑みを浮かべていた。  
「な……何をした！」

「甘いねえ。確かに君の猛毒のおかげで、僕の顔の傷は一生消えな  
いものとなつちまつたかもしれないねえ。だったらよお、なんで心臓に  
攻撃しねえんだ？そこが甘すぎるだろ。だから擦れ違いざまに食ら  
ったパンチに気付かねえんだよ！」

「ば、パンチを繰り出していたのか！？」

桐谷は怜次のパンチを食らったことすら分らないままだった。

「終わりだ……」

怜次は桐谷に向かってゆつくりと歩く。すると桐谷はニヤリと笑み  
を浮かべた。

「へへ……そうかい。」

「ん！？」

桐谷は突然爆弾を上に向かって投げて、爆破させた。

爆破音は橋の下だけでなく、東京の街全体に響き渡った。爆弾の煙  
はとても濃いものであり、煙幕のようなものだった。

「……」

「小笠原怜次、今回は俺の負けを認めるよ。だが見ているよ！お前  
がこのヤクザ界を牛耳る寸前で俺は貴様を殺してやる。」

「クッハッハッハッハ！そうかそうか、そいつは楽しみだ。」

「……ケッ！さらばだ。」

煙が晴れると、桐谷の姿は無くなっていた。

「クツフツフツフ！敵が増えちまったなあ」  
怜次は顔中血まみれになりながら煙草を口に加え、その場を後にした。

桐谷は街の家の屋根などの上を飛び移りながら逃げていたようだ。

「……………もう二度とあんな奴とは戦いたくねえな。」  
この世に恐ろしい物など無かった桐谷。しかし今、眼前に現れたあの男は間違えなく桐谷に恐怖を与えていた。

桐谷龍次と小笠原怜次。

彼らがもう一度戦う日はそう遠い日のことではない

## 扉の向こうから

2001年10月5日朝6時。

「ふざけるなよ teme エ？ どういうことか説明しろ！」

誠は朝っぱらから勇太郎の胸ぐらをつかみながら激怒する。

「だからあ、ここに小笠原組が攻撃を仕掛けてくるのは時間の問題だつて言つてんだよ。」

「ふざけんじゃねえよ！ なんとかしろよ！ 何で俺たちがそんなものに巻き込まれなくちゃならねえんだ！」

平凡な日常を奪われるという不安から来る怒り。 それをおさえることが出来ない誠は、ただひたすらに大きな声で誠に怒鳴る。

「勇太郎。 お前ももう少し真面目に考えたらどうだ？ 俺たちは何もしていないのに事件に巻き込まれようとしているんだ。 なんとかして俺たちを巻き込まないように努力する姿勢を俺たちに見せてくれよ。」

と清もやや怒り気味に言う。

「んなこと分かつてんよ！ まさか桐谷組も小笠原組にかなわないだなんて思わなかったんだよ！」

と勇太郎も少し怒り気味になる。

「チッ、俺たちはこれからどうなっちまうんだ？」

「おそらく中隊規模の攻撃を受けるだろうさ。」

「クソ！・・・ゴチャゴチャ言つても変わらねえ。 もう戦うしか方法はないんだろうさ。」

と言った誠は悔しそうな表情で短刀を手にとった。

「勇太郎。 とりあえずお前は俺たちのところに小笠原組を近づけないように努力してくれ。 俺たちもそれなりに身構えておく。」

「ああ。 分かったよ。」

喫茶ねこばは混乱しつつも武装を開始するのだった。

その頃、西新宿七丁目のオフィスビル『小笠原ビル』の6階では、小笠原組の幹部たちが集まり、現在の戦況について話し合いをしていた。

「倭将豹弟団の数は半端じゃありません。やはり、何度か攻撃したくらいではビクともしません。」

倭将豹弟団は日本のヤクザ界を仕切る巨大なヤクザ集団だ。先日、小笠原組は倭将豹弟団の一味に攻撃を仕掛けたいのだが、小笠原組の勢力ではかなう規模の相手では無かった。個々の戦闘能力では小笠原組の方が勝っているのだが、日本全国あちこちに散らばってしまつては、皆殺しにすることもできない。

すると小笠原怜次が、組員たちに質問をした。

「倭将豹弟団の会長はどこにいるんだ？」

「それが……分らないんです。倭将豹弟団の会長の情報はどこに行っても見つからないんです。」

「ほほお……。影に潜む存在というわけか。クフフフ、まあいい。豹弟団の奴らを片っ端からぶっ殺してはきりがないとりあえず、会長の事を知っていそうな人間を捕まえて吐かせるしかねえな！」

小笠原組は拷問好きだ。

ネタを持っている人間から吐かせるのが常套手段になってしまっている。

「了解です。情報収集を頑張ります。」

「まあ情報が手に入るまで少し休戦とするか。」

と言つた怜次は、煙草を口に咥える。

するとその時、怜次達のいる部屋の出入り口の扉が、ものすごい勢



いでボタンという音を立てて開いた。

「なんだ!？」

組員たちは驚き、一斉に扉の方に銃を向けた。

「ん？」

扉を開けたのは、1人の少女だった。

身長は大体140センチで小柄。髪型は黒髪のショートヘア。

見た目は10歳くらい、服装はボロボロで、まるで乞食かホームレスのような姿をしていた。

「誰だデメエ！」

組員たちは恐ろしい表情でその少女を睨む。すると怜次が煙草をくわえながら右手をスツと上にあげて、組員たちに銃を降ろさせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は今にも泣き出しそうな表情で怜次を睨んでいた。

「1人の少女相手に、何を殺気立ってんだよオメエら？」

「も、申し訳ありません！」

と言った組員たちは、一斉に怜次に向かって頭を下げる。

怜次は頭を下げている組員たちの間を通り、少女の目の前まで来た。

「クフフフフ。小娘、いったい何の用だ？ここは貴様のような者が来るところでは無いぞ？」

怜次は少しだけ笑みを見せながら少女にそういった。すると少女は、大きな声で怜次に向かってこう言い放った。

「私を仲間にしてくれ！」

ここにいる人たちは皆驚いた。

「あ？」

怜次もとぼけたような表情になる。

「私を小笠原組の組員にしてくれ！」

「ダメ。」

怜次はあっさりと少女の要望を断った。

「どうして!」

「まず、服が汚い。」

少女の何日も洗われていない服に、怜次は指をさした。

組員たちは怜次のこの発言に対して、心の中で突っ込みを入れていた。

（服!? まず服の指摘かよ! もっと指摘するところあるだろ。つか、こんな少女が俺たち小笠原組に入れるわけねえだろ?）

怜次は続けてさらにその少女に指摘をする。

「体も汚いし、髪も汚い。そんな姿では忠誠は交わせないぞ?」

怜次の隣にいた組員もその少女にやじを飛ばす。

「そうだそうだ! そんな姿じゃ忠誠は………え!?!」

思わず組員たちは驚いてしまった。

怜次が言ったことは、不潔でなければ忠誠を交わしても良いと解釈できてしまうからだ。

「く、組長?」

「おいお前ら、何か着るものを用意させてやれ。あと風呂の準備もしろ。のぞきはするなよ!」

（するわけねえだろ! こんなペタンコ少女の裸なんか見てもなんも興奮しないわ! つーか仲間にするのかよ!）

と組員たちは思いながら服と風呂を準備し始めた。

少女が風呂に入っている間に、組員たちは怜次に質問をした。

「組長、いったいどんな考えがあるんですか?」

すると怜次は煙草を啜えながら不気味な笑みを浮かべてその質問に

答えた。

「あの少女、おそらく親がヤクザだろう。」

「なぜ分かるんですか？」

「今どきあの年齢であんな姿している奴なんて、ヤクザの子供くらいだろう。」

「そうなんですか？」

「そうに決まってる。不純異性交遊や売春とかから生まれた子だろう。あんな風に育てられちゃってんだからなあ。つまり、あの少女の背後にはヤクザが絡んでいると僕は考えたんだ。僕の予想ではあの少女はどつかのヤクザ集団のスパイか何かだと思うんだ。僕らはそのスパイがいったい何をしようとしているのかをしっかりと観察しようじゃないか。これは良い機会だぞ？もしかしたら豹弟団ともつながっているかもしれない。」

「は、はい………」

組員たちは怜次のその考えを聞いて、驚くと同時に、感心した。あの一瞬でこんなことまで考えてしまうのだから。

極悪非道なバケモノ小笠原怜次があんな少女に情けを与えてしまうのかと、一瞬不安になってしまっていた組員たちだったが、やはり怜次は怜次だ。小笠原組の組長としてふさわしい人物だ。

それにしても、あの少女の正体はいったい何なのだろうか。

突然現れて、『仲間にしてくれ』だなんてそう簡単に言えることではない。たとえあの少女がスパイだったとしてもだ。

（もう少し調べてみる必要がありそうだな………）

あの少女は、敵か味方か？邪か正か？それとも何かもっと特別な者なのだろうか？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7245v/>

---

この傷が無くなるまで

2011年12月25日20時56分発行